



2009年 国際協力学博士課程修了。

東京大学法学部卒業後、
1990年海外経済協力基金（OECF）に就職。
約14年間、ダム建設など途上国の開発援助プロジェクトに携わる。

退職後、国際協力学専攻にて修士号および博士号を取得。

明海大学経済学部講師を経て、現在は法政大学人間環境学部教授を務める。

—現在どのようなお仕事をされていますか？

現在、法政大学人間環境学部で教鞭をとっています。ここは持続可能な社会をつくる人材を輩出したいという目的で、環境に関係した様々な学問分野の先生が集まっている学部です。その中で私は、学部と大学院で、国際協力や途上国に関する科目を教えると共に、ゼミナールと、学部の大きな特徴の一つでもあるフィールドスタディを担当しています。フィールドスタディは環境問題や持続可能性に関係した問題が起きている現場に行くという、座学とは違ったカリキュラムを構成しています。今まで、カンボジアやインドなどの途上国へ夏休みの期間に学生を引率して訪問しました。この学部の学生はわりとドメスティックなことに関心が強い人が多数派で、将来国際的に働きたいですとか、外国の人とコミュニケーションをとりながら仕事をしたいという人はマイノリティなんですね。逆にいうと、国際協力学専攻の学生たちみたいに国際的な問題に関心がある人たちが母体にいるわけではないので、このフィールドスタディはいわゆる「途上国入門編」という感じで行っています。「なんとなく関心あるけど、自分では踏ん切りがつかない」、親御さんからも『一人で行くのはダメ』と言われてしまう・・・。そういう学生たちを連れて行って、世界の現状を知ってもらおうというのが目的です。同時に、途上国だけでなく、日本のことを考えてもらうことも目的としています。今年訪問予定のスリランカは2004年のインド洋大津波の被害を受けたところですので、10年以上経過した現地の復興状況と合わせて、日本の東北の復興の現状や方向性を考えられるように計画を立てています。単に「途上国は貧しくて可哀想だから助けなきゃね」という話ではなくて、「なんで日本に困っている人がいるのに、途上国の人を助けなきゃいけないの？」という疑問も含めて様々な考えをもらいたいと思って企画をしています。

また今、留学生の受け入れを目的として、英語だけで124単位全部とれるようなプロ

グラムを学部内に作るプロジェクトの準備をしています。学生にいくらドメスティックな関心しかなかったとしても、就職をしたら海外で仕事したり、アジアの人と付き合う機会ってこれから先多くなると思うんですね。日本人学生の為にも、大学にいる間からベトナムやラオスなどのアジアの国の学生と付き合う機会を作ってあげたいと思っています。また、海外の人たちの経験から学ぶこともきっとあるだろうし、そういう国の人達が日本のことを好きになって帰ってくれるといいなと思って準備しています。

—なぜ国際協力に興味を持ったのですか？

私は途上国での国際協力とか貧困撲滅というようなテーマより、むしろ「持続可能な開発の中身は何か」「環境と開発のバランスを知りたい」という興味が出発点でした。その上で国際法や政治外交史など勉強していく中で、「先進国と途上国の関係」や、「途上国が何故途上国と呼ばれる状況にいるのか」ということについて学ぶ機会があって、そこから「途上国」に関心が向き始めました。日本のような先進国だと、既に生活が十分便利で、「環境を守れ」という方向にしかドライブが基本的にかからないわけですが、途上国は、もっと日本みたいに便利な生活がしたいと思っている人たちが沢山いる一方で、先進国からは環境を守らなくちゃいけないとブレーキをかけられている。そんな場所で「どういう開発ならいいのか」という質問に対する答えを探したり、自ら答えを作ったりしたいと思いました。

そしてそういうことができる仕事は何か？と考えた時に、「研究者」か「援助機関の職員」という選択肢に行き着き、学部卒業後は海外経済協力基金(OECF)に入社しました。当時、OECF がやっていたのは「大金を投じてダムを作る」というインフラ開発の世界ですので、環境とのコンフリクトがあるし、人々との生活を大きく便利にも不幸にもする現場だと思いました。環境と開発のバランスの答えを見つけたり、自分たちで向こうの人たちと答えを作れたり、楽しいかなと感じて、その世界に入ったという感じですね。

結局 14 年間 OECF (とその後身の国際協力銀行 (JBIC)) で働きましたが、確かに自分が思っていたようなことに携っているという感覚や楽しさを感じていました。一方で、もともと入るときにも認識していましたが、OECF は日本政府の組織ですので、日本の国益というものを追求していかなくてはならず、自分の考えや意向と日本政府の方針が微妙に食い違う部分がありました。ですので、実務から離れて、自分なりにもう少し「環境と開発のバランス」や「いい開発とは何か」ということを考えたくなったんですね。同時に、1997 年から 2000 年にかけてインドに駐在し、外から見た日本の姿や、外で見たり聞いたりする日本の印象に触れて、日本社会も大丈夫なのかなと思うことも沢山出てきました。OECF は円借款でプロジェクトを進めていて、ある程度国益にかなっていたので、それはそれで日本のためになっていたのかもしれないですけど、もう少し別の形で日本の人たち、特に若い人たちに自分から伝えたり、考えてもらうきっかけを与えたりすることができないのかなと思い、研究者や教育者を目指すという選択を考えました。私が JBIC を辞めたのは 38 歳で、大学の教員も含め新たな職につけるかどうかは運に左右される部分もありますので、多少の葛藤はありましたけど、大学院に行って勉強し直そうと考えてこの専攻を目指しました。

—専攻に入って得られたことを教えてください。

一つは研究の持つ意味を教えられました。例えば私は「開発と環境のバランスはどこにあるのか?」、「いい開発とは何か?」という問いに対するストレートな答えがほしいと思っていました。でも大学院に入って、他の人が書いている研究論文を読んだり、先生方に指導して頂いたりする中で、「そういう大きな問いに答えるために全世界で沢山の研究者や実務家が活動していて、自分の書く論文ではその中の小さい小さい砂粒のような問いの一つの答えが見つけれればいい。そして、砂粒の一つをとにかく自分で作って、最終的には全世界の人たちがそれを積み重ねれば、大きな問いを解決するための道のりができるんだ」ということに気付かされました。



修士の研究テーマは「ダム建設に伴う住民移転」で、実務時代にも携わっていた内容でしたし、いい開発・悪い開発を考える上でもいい題材であったなと思いますね。

さらに、当時社会文化環境学専攻におられた、環境倫理学の分野で著名な鬼頭秀一先生の授業やゼミにも参加していました。先生のゼミなどを通して、自分が学びたかった環境と人の関係について知っておくべきことや考え方を学びました。鬼頭先生の授業は全部楽しく勉強した記憶があります。

大学から新卒で DOIS に入学する修士の学生の中に混じって勉強することは年齢の点から若干の気後れみたいなものも当初は感じましたが、自分が十数年そういう分野で仕事してきたからこそ、それなりの自信みたいなものもあって、違和感はそこまで強く感じませんでした。逆に先生方とは年齢が近い分、普通に付き合える感覚もありました。特に、指導教員であった中山教授とは OECF 時代からお付き合いがありまして、公私共に大変お世話になっていましたね。

—専攻在学中の課外活動があれば教えてください。

自分の調査研究のために、インドネシアやスリランカ、日本国内へのフィールド調査は行いましたが、私にとって当時の一番の課外活動は育児でした。DOIS 在学中、ちょうど国際開発学会の前々日くらいに子供が生まれたんです。自宅が横浜でしたので、柏キャンパスまで往復 5 時間かけて、電車で論文を読んで、帰宅したら、赤ちゃんの面倒を妻と一緒にみるという生活をしていました。育児をして子供の成長をみて、人間という生き物について考えることも増えました。

また、当時 DOIS の博士課程には割と社会人の方がいらっしやいまして、そういう人たちと月に一回勉強会のようなサロンを作っていました。社会人学生は基本的に仕事をしておりあまり顔を合わすこともないので、他の先生の指導内容の紹介や、研究お悩み相談という感じで、みんなで和気あいあいとやっていました。それぞれ専門分野は違いましたが

お互いに研究のアドバイスや相談をしたり、時には愚痴なんかもこぼしたりして、皆で盛り上がっていましたね。

—学生時代の経験が今の仕事にどう活かされていますか？

基本的には今までの人生すべてのことが活かされているなという風に思います。特に学生時代に区切っていうと、学術書から、小説とか漫画、自分には直接関係がないだろうなとかと思うような分野のものも含めて、かなりたくさん本を読みました。本を読んできたことで、人の感情に対する想像力や、今起きていることが未来にどう影響するのかという部分での想像力が鍛えられたと思います。それが今の仕事の中では一番活かされているのかなという風に思っていますね。今でも本を読むのは好きなのですが、最近読んだ本の中では、鷲田清一の「語りきれないこと：危機と傷みの哲学」と、平田オリザという劇作家が書いた「わかりあえないことから：コミュニケーション能力とは何か」の二冊をゼミ生に強く薦めています。似たようなタイトルですが(笑)、その二冊は自分が言おうとしていること、考えてきたことを言葉にしてくれている本と言う感じがします。

—今の仕事で、楽しいこと・やりがい・辛いことは何ですか？

「言いたいことを言ってもらえる」ことが楽しい部分かもしれません。皆さんも自分のことを思い返して頂けるとわかると思うんですけど、大学の時、先生に言われたことって大して残っていないと思うんですね。教育というと、すごくデリケートなものに聞こえるんですけど、大学生は既に人格ができていますので、そういう意味においては、人格形成みたいなものにあまり大きな影響は与えないと思うんです。でも社会の見方について、知らなかった視点を伝えたりすることはできるかなと思っています。その見方を受け入れるか受け入れないかは本人たちが決めることだし、絶対そうやった方がいいよとも保証はできないので、その観点に立てば、「好きなことを言ってもらえる」というのが一番楽しいことなのかなという風に思いますね。また、学生が卒業までに成長していく姿を見られる点は楽しく、やりがいという部分でもあります。辛いことはあまりありません。強いてあげるならば、先程の新しい教育プログラムの立ち上げがかなり忙しい反面、周りからは好きだからやっていると思われるのが若干辛いということでしょうか(笑)。でも、周りの皆さんに支えてもらいながら自分の趣味のように楽しくやらせてもらっています。

—実務と研究は大きく異なると思うのですが、逆に共通している部分はありますか。

自分の生きてきた道を振り返ったり、これからやっていくであろうことを考えたりした時に、やはり自分が抱いてきた、持続可能な社会をどう作るのか、それはどんな社会なのかという問いにすべて繋がっているという気はします。それを共通点というかは微妙なんですけどね。

援助機関にいた時は、途上国の人たちを相手に仕事をしていたんですけども、今は日本の若い人たちを相手にしています。結果的に自分のやっていること、やれたらいいなと思っていることが、その持続的な社会というものに何らかの形で繋がればいいなと思っています。

—国際援助機関で働かれる方、研究者の方に求められる知識や能力は何だと思いますか？

学生にも伝えているのですが、「コミュニケーション能力」、「想像力」、「心の体力」の三つが大切だと考えています。

これについて話し始めると三時間ぐらい話してしまうので短くしますと(笑)、まず「コミュニケーション能力」は、単に話すのが上手とか、話題が豊富とか、冗談が言えるだとかそういうことではなくて、「理由を言えること」だと思うのです。学生によくあるのが、グループディスカッションで意見を求められると急に固まってしまうこと。でも、彼らに求めているのは好きか嫌い、いいと思うか悪いと思うかをまずは口にしてみようということなんです。そしてその後で、なぜそう思ったのかを自分の言葉で説明しようと。結局、日本人とであっても外国人とであっても、コミュニケーションするっていうのは、最初に表明された意見や判断そのものが大事なのではなく、なぜそう言っているのか、なぜそう思ったのかを聞くことだと思うんです。でないと、そこから先に話が続きませんよね。

例えば就職活動をしていると、会社の志望動機って聞かれますよね。私が前勤めていたような組織だと、十中八九、「援助がしたいから」とか、「国際的な仕事に関心があるから」という答えが返ってきて、区別が付きません。だから、採用する側は、「じゃあなぜそれを仕事にしたいのか」と聞くのです。そこが本当の志望理由だから。国際協力や貧しい人を助けることは、表面に出てくる行動であって、じゃあなぜそれを仕事でやりたいのか。二回くらいなぜかって突っ込まないと、その人がどんな価値観を持ってどうその結論に至ったのかってということまでわからないんです。私はそれがわかって初めて、コミュニケーションがその先に成り立つ、と考えています。

二つ目の「想像力」は、「他の人の立場や人生に思いを馳せてみる」ということ。援助の話でいうといくら援助機関の日本人が長く現地に駐在しても、現地の人に同化することはなくて、結局はそこを通過する人でしかないんですよね。だからこそ、自分が現地の人々の立場だったら、通過するだけの人が来てあれこれ言っているのをどう受け取るのだろうとか、どう感じるのだろうとか、そういう意味での想像力が必要だと思います。援助機関で働いていた時に、自分の中ですごく印象に残っていることが一つあるんです。ダムを作って、電力や水を供給するっていうプロジェクトを担当していた時、自分にとってはあくまでも一つのプロジェクト、仕事の一部であるものが、途上国の現地の住民にとっては人生そのものなんだと気付いたんです。そのプロジェクトに巻き込まれている人たちにとってみると、たとえば60年くらいの人生のうち10年くらいダムを作ったりしているんですよ。ダムが出来上がってから、水の供給を受けたりすると、そのダムに関わっている部分はさらに大きくなっていく。その感覚を、想像力として持てることは、実は援助機関で働く人間には大事だろうと思っています。先進国の都会で暮らしているとあまり感じないのですが、今でも日本でも開発は進んでいますよね。ある日副都心線ができる、それって開発じゃないですか。だからそう考えると、実はわれわれも同じように今でも開発というものに晒されていて、開発が自分たちの生活の中に入ってきている。でも、今さらそこにビルが一つ建ったからといって、私たちの人生に付加されるものは、マージナルな点に

なっていて(笑)、開発を意識はしないですよ。でも、途上国の人にとってみればそれってきっとすごく大きいと思うんです。今の日本だと、それはもうわれわれの眼には見えないくらいゆっくりした変化で、影響の少ないものなのだけれども、途上国ではすごく早くやろうとしているので、そこに巻き込まれている人たちは恐らく急流下りをずっとやっているような感覚なのだと思います。しかもそれを外国の人が持ち込んでくるんだから。ただ、それがいい悪いという話ではなく、そういうものなのだとわかってやるのと、そうでないのは全然違うのではないかという話です。



三つ目の「心の体力」は、正しい答えがあらかじめ与えられていないような問題から逃げてしまわない、心のスタミナということです。開発に限らず、人生を送っていると、答えが出なかったり、どうしたらいいかわからなかったりする問題がたくさんあると思うのですが、四六時中それについて考えるのはさすがに無理ですよ。途上国に行って、物乞いをする子どもたちを見て、胸を痛めて帰ってきても、成田に着いたら普通の生活に戻ってしまう。そういうのを、ある研究者は「居心地の悪さ」と表現しているんですけども、先進国の人間で、開発に関心を持ってしまった人間は、その居心地の悪さを引き

受けて、抱えて生きていくしかないと思うんです。その居心地の悪さを解消したいがために、簡単に寄付をすとか、何かボランティアをやっけて片付けるとか、そうではなく、本当にコミットするのであれば、その問題をずっと考え続けること。ただ、四六時中それについてばかり考えて生きるのは難しいので、自分にできる時にそれを考える、でも簡単に捨ててしまわない、そういう姿勢が大事なのかなあと考えていますし、学生にもそれを求めています。

—これからのご自身の夢を教えてください。

持続可能な社会や開発とは何かというものの答えを、引き続き探していけたらと思っています。自分が生きている間に、何かこれが答えかなって思えるものを見られるといいなって。なんとなく今のままだと危ないものしか見えてこないの(笑)。これで大丈夫なのか、うちの息子はこの社会で、この世界で生きていくのかって心配になることが多いんですけど。少しぼんやりしていますが、世界がこうなってよかったなってものを見たり、創ることに関与したりしたいです。

—「国際協力」とは何ですか。お考えを教えてください。

そうですね、たぶん「一緒につくる」ということかなあと考えています。つまり、先進国の人間だから、途上国の人たちの問題を知っているし、その答えも知っている、ではなくて、お互いどこに行けばいいのかよくわからないけれども、一緒に考えて、進んでいきましょうねということです。その実践のひとつの形なのかなあと 생각합니다。国際協力というのは、決して豊かな先進国が貧しい途上国を助けるっていう単純な話ではなくて、お互いが持っているもの、お互いが知らないことを融通しあって、何か新しいところにたどり着くためのひとつの手段なのだと思います。国際協力だって70年くらいやっていますが、貧困がどうすればなくなるのかわかっているわけではないし、再三言っているように開発と環境のバランスだってわかっていないし、日本だってこの先の日本社会をどうすればいいのかわからないじゃないですか。だったら、三人寄れば文殊の知恵じゃないですけれども、みんなで考えて何か良さそうなものを見つけていこうっていう、そういうことなのではないでしょうか。

—国際協力に興味を持っている学生へメッセージをお願い致します。

自分が望ましいと思うもの、これがよいと思うもの、そういった価値観みたいなものを、自分の中で確立してほしいと思います。そして、その価値観を、コミュニケーション能力の話で言ったように、言葉で伝えられるようになること。それがベースにあって初めて、「一緒につくる」という作業に入れると思うのです。

ですので、学生時代は自分の中にある価値や、判断や選択、評価の基準にしているものを見つけ、それをいろんな学問分野、事例を見ることで鍛えるという作業をやっていただければと思います。そして、先にお話ししたコミュニケーション能力、想像力、心の体力の三つをぜひ身につけて鍛えていって頂きたいですね。

2015年6月19日(金) 法政大学市ヶ谷キャンパスにてインタビュー

修了生：武貞稔彦さん(法政大学教授)

聞き手：中村信之(修士2年)、篠田景子(修士2年)

編集：中村信之、篠田景子